

水俣病は叫ぶ

(20)

行く、それ以後協議会は開かれな
いまま。中和が完全に成功し
ていることがわかる。

この協議会で消費された予算は
一千万円を越えている。三十三年
期大に厚生省が初めて出した予算
はわずか百万円であった。

もう一つの田舎委員会は、熊本
ではほとんど知られていない。い
や、中央でもそうである。新聞に
も発表されず、こっそりスタート
(三十五年ごろ)している。この
ことが、この委員会の本質を如実
に物語っている。

も出す。その代わり、社会的に影
響の大きなことは軽々しく発表し
ない」という条件が付いていた
というのである。そして同学長の
話によると、当時出富委員会には
日本化学工業会から三千万円くら
いの研究費が出されたというウワ
サがあったという。

は開らかたし、無機水銀が体内
でメチル化するという考えは、も
ろこの時点で大田でも肯定的で
あったのである。

しかし、この委員会がこんな結
論を出しただけで原因追究の大勢
に影響を及ぼさなかったのは、委
員会に大田が参加しなかったから

それでは、期大の有機水銀説と
異説をつき合せて、結論を早々
ひねり出すための「中和の場」は
何であつたろうか。

水俣病の総合的な調査を実施す
ると、田の手で設けられた「水俣
病総合調査研究連絡
協議会」が一つ。も
う一つは、日本医学
会長であり、東大医
学部長だった田宮猛
雄氏(故人)を中心
に中央の「権威」を
集めて組織された、
いわゆる「田舎委員
会」である。

中和の場

協議会がスタートしたのは三十
五年一月である。前回お伝えした
ように三十四年十月の答申を出し
た翌朝に鶴岡期大学長(当時)を
代表とする厚生省食品衛生調査会
水俣食中毒部会(当時唯一の国の
調査機関であった)が解散を命じ
られてから三ヶ月ばかり後であ
る。これが「一応正式な国の調査機
関として登場するわけである。

メンバーは期大から内田博男
(生化学)高田正次(公衆衛生)
の二教授。清浦博作(東工大、宇田

東京水産大、富山九大、松江東大ら
の各教授。通産省から軽工業、工
業用水の二課長、経産庁から水質
系の塩物が抽出された実験事実が
保会、同調査の二課長、厚生省か
ら高野食品衛生課長ら計十六人。
メンバーを見る限りまことに嚴
論することは今後の研究に待つべ
にされてしまふ。

中央の権威集め組織

わけのわからぬ結論に

正公平のようなが、議事録で調べ
てみると、見事な「中和」が行な
われていることがわかる。そして
三十五年一月から三十六年の三月
までたった四回の会議を開いて、
自然消滅してしまふのである。

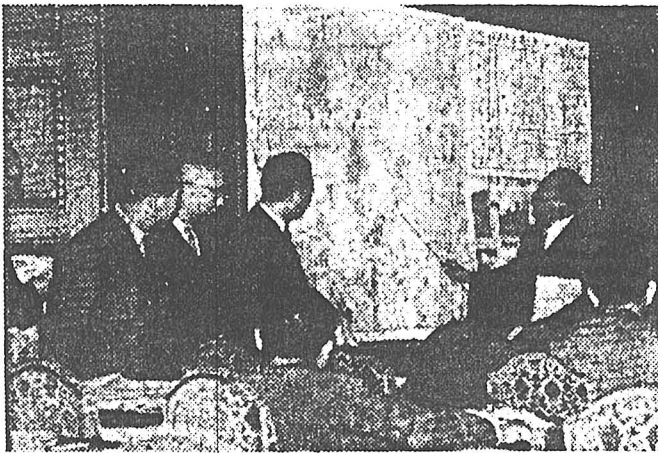
議事録を見よう。第一回は内
田教授の只から有機水銀抽出実験
の結果報告(また抽出されていな
い)と研究の分担打ち合わせ。清
浦教授が巧みに内田教授の実験を
批判している。

き(取材班注)すに期大では三
十二年ごろ検討、否定している)
であり、協議会としてもなお、討
議を続ける方針である」

第二回は、この席上で「今
後対外発表は十分注意したい」と
申し合わせ、結論にそれを折り込
んだことである。期大は自由に発
表してはならぬと事実上、言論
統制が敷かれたわけだ。

最後の第四回では、とんでもな
いことが持ち出される。「内田教
授と同じ方法を用いたら、横須賀
の只からも同じ物質が得られた」
というのである。これも清浦教授
(東工大)の各教授。まさに、泣
く子も黙る「権威陣」である。

当然、期大にも参加を呼びかけ
ている。期大は参加を拒否した。
鶴岡学長は「三十五年秋に呼びか
けがあった。期大が一応結論を出
したいまとなつて、一体何をす
るのかと腹が立つて、使いの
人を追い返した」と言っている。
「入会すれば研究費はいくらで
果からエチル水銀中毒でないこと
だと言えぬ。もし参加していれば、
真因は「権威」と「金力」に
甲殺されかねないところだった。
私は、水俣病の歴史の中で
「公正な機関」と「権威」の
実体を見るべきであった。私たちが
の手で自らを守ることをもつと
考えざるべきであらう。期大研



第一回の連絡協議会。一千万円以上の予算を使ったが
結論もなく解散した (35年1月写す)